

新約聖書 ルカによる福音書 24 章 44 節—53 節（新共同訳）

<sup>44</sup> イエスは言われた。「わたしについてモーセの律法と預言者の書と詩編に書いてある事柄は、必ずすべて実現する。これこそ、まだあなたがたと一緒にいたころ、言っておいたことである。」<sup>45</sup> そしてイエスは、聖書を悟らせるために彼らの心の目を開いて、<sup>46</sup> 言われた。「次のように書いてある。『メシアは苦しみを受け、三日目に死者の中から復活する。<sup>47</sup> また、罪の赦しを得させる悔い改めが、その名によってあらゆる国の人々に宣べ伝えられる』と。エルサレムから始めて、<sup>48</sup> あなたがたはこれらのことの証人となる。<sup>49</sup> わたしは、父が約束されたものをあなたがたに送る。高い所からの力に覆われるまでは、都にとどまっていなさい。」

<sup>50</sup> イエスは、そこから彼らをベタニアの辺りまで連れて行き、手を上げて祝福された。<sup>51</sup> そして、祝福しながら彼らを離れ、天に上げられた。<sup>52</sup> 彼らはイエスを伏し拝んだ後、大喜びでエルサレムに帰り、<sup>53</sup> 絶えず神殿の境内にいて、神をほめたたえていた。

※第1朗読と第2朗読は本紙末尾に掲載

### 説教「心の目」

本日の福音書の冒頭で、イエスは弟子たちにこう言いました。「わたしについてモーセの律法と預言者の書と詩編に書いてある事柄は、必ずすべて実現する。これこそ、まだあなたがたと一緒にいたころ、言っておいたことである」。

「モーセの律法と預言者の書と詩編」とは、旧約聖書のことです。イエスは、弟子たちと一緒に生活をしていた頃、そこに書かれていることを弟子たちに語っていました。旧約聖書に記されていることは、神の計画であり、イエスは、その神の計画に従っているのです。

イエスはこれまでに「人の子は、定められたとおりに去って行く」（詩編 41 編と関連して）とか「『その人は犯罪人の一人に数えられた』（イザヤ 53:12）と書かれていることは、わたしの身に必ず実現する。わたしにかかわることは実現するからである」と弟子たちに教えていました（ルカ 24:44）。いずれも旧約聖書の預言が実現するという意味です。

イエスは弟子たちに、以前自分が話したことをまず思い出させようとしたのです。そして、聖書に書かれていることを、弟子たちに深く悟らせるために、彼らの心の目を開いて、さらに話し続けました。

イエスが彼らの「心の目を開いた」とありますが、原文を直訳すると「聖書を理解するために、彼らの理性を開いた」です。当時、信仰に関わる事柄は「理性」が認識するのだと考えられていました。信仰とは、知性や理性を開くことなのです。

イエスが弟子たちに旧約聖書について、「次のように書いてある」と言ったのは、「それは神の計画であった」ということです。イエスの教えは新しいもの

ではなく、古いものを適切に解釈したものなのだ、ということになります。旧約聖書ですでに示されていた神の計画は、救い主である神の僕が苦しみを受け（イザヤ 52:13-53:12）、三日目に死からよみがえり（ホセア 6:2）、キリストの名によって罪の悔い改めと赦しが人々に与えられるというものです。

イエスは生前、「わたしが来たのは、正しい人を招くためではなく、罪人を招いて悔い改めさせるためである」と語ったことがありました（ルカ 5:32）。罪の赦しにいたる悔い改めが、イエス・キリストの名によって、全世界に宣べ伝えられるというのです。

弟子たちはその宣教をエルサレムから始めなければいけません。ルカ福音書では、エルサレムが世界宣教を開始する場所です。

しかしイエスは、弟子たちに、直ちにそれを始めるようにとは命じませんでした。「高い所からの力に覆われるまでは、都にとどまっていなさい」と言ったのです。「高い所からの力に覆われる」とは、「聖霊を与えられる」ということです。

弟子たちには、まだ民族を越えた全人類への宣教に向けて大きな行動に移る心の準備、そのうつわができていませんでした。だから彼らは、約束を待たなければならないのです。それは、神からの力である聖霊が与えられるという約束です。

神が、約束された助け主である聖霊を与えた時、弟子たちはもはやそれまでの彼らではなく、新しく創造された、聖霊のうつわとなるのです。

イエス・キリストがよみがえり、天に上げられるまでに、四十日の期間があり、たびたび弟子たちにあらわれて、神の国のことを語られたと、使徒言行録 1:3 に書いてあります。ルカ福音書と使徒言行録は同じ人が書いたのですが、この著者は、よみがえりから昇天までの時間的経過の説明は、使徒言行録に書くゆえ、ルカ福音書においては省いたものと考えられます。

イエスは弟子たちを、ベタニヤの近くまで連れて行き、手を上げて彼らを祝福しました。そして、祝福しながら弟子たちを離れ、天に上げられました。祝福は、神の加護と恵みに委ねるといふ祭司的な行いです。「高い所からの力に覆われる」—— 約束された聖霊が来る前にすでに、弟子たちは神の温かい配慮を確信するのです。

イエスの昇天は、地上のナザレのイエスの働きの完了を意味します。ほぼ三年間であったと考えられる、主イエスの旅は完了します。弟子たちに別れを告げるその舞台として、イエスはベタニアを選ばれました。そしてイエスは、そこで弟子たちと別れ、地上の歩みを完成させたのです。

この完了は、十字架の死をもって完了となったわけではありません。弟子たちの前で、弟子たちから「離れ、天に上げられた」ことをもって完了となったのです。

イエスが天に上げられた時、弟子たちはイエスを伏し拝みました。「伏し拝む」

(プロスキュネオー)とは、「礼拝する」という意味です。

天に上げられるイエス・キリストを拝した弟子たちは、主イエスのよみがえりの時に抱いた驚き、恐れ、疑い、不信を持つことはありませんでした。イエスが天に上げられたことによって、がっかりしたり塞ぎ込んだりすることはありませんでした。彼らは大きな喜びをもってエルサレムに帰り、神からの約束の力を待ち、絶えず神殿の境内にいて、神をほめたたえたのです。

ルカ福音書はここで終わり、続編の使徒言行録に話は続きます。ルカ福音書のこの終わりの場面は、神は確かに働いており、何か驚くべきことがやがて起こるのだろう、と私たちに予想させます。

一般的には、大切な人との別れは悲しみをもたらすものと考えられています。もう二度と会うことはできない。それは悲しみと涙を呼びます。

ですが、このルカ福音書の最後は、明るさに満ちています。イエスと弟子たちとの別れの場面でありながら、そこには微塵の嘆きも悲しみも憂いもありません。

ここではイエスと弟子たちとの地上の別れが、弟子たちに大きな祝福と喜びをもたらしたのです。

私たちも、この人生の中で、人との別れを経験しなければならないことが多くあります。

お互いが生きたまま別れることもあれば、死に別れることもあるでしょう。

人との別れが辛いと感じる時は、イエスが弟子たちと大きな祝福と喜びをもって別れた、本日の福音書の箇所を思い出してみてください。

「高い所からの力に覆われるまでは、都にとどまっていなさい」。

というイエスのこの言葉は、人との別れの悲しみ・喪失感から、無理に自力で立ち直ろうとしなくてもいいのだということを、示唆しているように思います。

イエスは、「祝福しながら彼らを離れ、天に上げられ」ました。弟子たちはそのイエスを伏し拝み、礼拝しました。

私たち人間同士の間でも、人が亡くなった時のお葬式というのは、亡くなった人と共に、キリストからの祝福を受けるときなのではないでしょうか。

礼拝とは、神から恵みを受け、神への賛美と感謝を表すときです。

私たちも、イエス・キリストへの賛美と感謝と共に、亡くなった人、そしてまだこの地上に生きている人々への感謝をもって、日々を歩んでいきましょう。

\*\*\* 説教ここまで \*\*\*

以下、本日に関連する聖書箇所（第 1 朗読と第 2 朗読）です。

### 新約聖書 使徒言行録 1 章 1 節—11 節（新共同訳）

<sup>1-2</sup> テオフィロさま、わたしは先に第一巻を著して、イエスが行い、また教え始めてから、お選びになった使徒たちに聖霊を通して指図を与え、天に上げられた日までのすべてのことについて書き記しました。

<sup>3</sup> イエスは苦難を受けた後、御自分が生きていることを、数多くの証拠をもって使徒たちに示し、四十日にわたって彼らに現れ、神の国について話された。<sup>4</sup> そして、彼らと食事を共にしていたとき、こう命じられた。「エルサレムを離れず、前にわたしから聞いた、父の約束されたものを待ちなさい。<sup>5</sup> ヨハネは水で洗礼を受けたが、あなたがたは間もなく聖霊による洗礼を受けられるからである。」

<sup>6</sup> さて、使徒たちは集まって、「主よ、イスラエルのために国を建て直してくださいるのは、この時ですか」と尋ねた。<sup>7</sup> イエスは言われた。「父が御自分の権威をもってお定めになった時や時期は、あなたがたの知るところではない。<sup>8</sup> あなたがたの上に聖霊が降ると、あなたがたは力を受ける。そして、エルサレムばかりでなく、ユダヤとサマリアの全土で、また、地の果てに至るまで、わたしの証人となる。」<sup>9</sup> こう話し終わると、イエスは彼らが見ているうちに天に上げられたが、雲に覆われて彼らの目から見えなくなった。<sup>10</sup> イエスが離れ去って行かれるとき、彼らは天を見つめていた。すると、白い服を着た二人の人がそばに立って、<sup>11</sup> 言った。「ガリラヤの人たち、なぜ天を見上げて立っているのか。あなたがたから離れて天に上げられたイエスは、天に行かれるのをあなたがたが見たのと同じ有様で、またおいでになる。」

### 新約聖書 エフェソの信徒への手紙 1 章 15 節—23 節（新共同訳）

<sup>15</sup> こういうわけで、わたしも、あなたがたが主イエスを信じ、すべての聖なる者たちを愛していることを聞き、<sup>16</sup> 祈りの度に、あなたがたのことを思い起こし、絶えず感謝しています。<sup>17</sup> どうか、わたしたちの主イエス・キリストの神、栄光の源である御父が、あなたがたに知恵と啓示との霊を与え、神を深く知ることができるようにし、<sup>18</sup> 心の目を開いてくださるように。そして、神の招きによってどのような希望が与えられているか、聖なる者たちの受け継ぐものがどれほど豊かな栄光に輝いているか悟らせてくださるように。<sup>19</sup> また、わたしたち信仰者に対して絶大な働きをなさる神の力が、どれほど大きなものであるか、悟らせてくださるように。<sup>20</sup> 神は、この力をキリストに働かせて、キリストを死者の中から復活させ、天において御自分の右の座に着かせ、<sup>21</sup> すべての支配、権威、勢力、主権の上に置き、今の世ばかりでなく、来るべき世にも唱えられるあらゆる名の上に置かれました。<sup>22</sup> 神はまた、すべてのものをキリストの足もとに従わせ、キリストをすべてのものの上にある頭として教会にお与えになりました。<sup>23</sup> 教会はキリストの体であり、すべてにおいてすべてを満たしている方の満ちておられる場です。

教会讃美歌 172 番「つくりぬしを」1,2,5 節、298 番「心まよいゆくをやめて」1,2,3 節、303 番「このまま」1, 2, 3 節、200 番「まことの神よ」1 節。